

植民地朝鮮における飛行機表象と朝鮮総督府の航空政策（下）

権 学俊ⁱ

本稿は、朝鮮人の飛行兵や特攻隊員が誕生するプロセスや志願背景を明らかにすることを目的とする。日本政府は戦況が悪化する中、操縦士不足を補うため、朝鮮人にも日本軍パイロットになれる制度を導入した。操縦士の養成は戦争の勝敗を決める喫緊の課題であった。朝鮮人青年が軍隊を選ばなければならなくなった理由の一つとしては、植民地収奪の強化と食糧不足の深刻な点が挙げられる。飛行兵学校は無料で専門的な技術や上級教育を受けられるメリットがあった。大空を飛ぶパイロットになりたいという、飛行機に対する憧れは重要な動機の一つであった。皇民化教育の影響と日本人に負けたくないという対抗意識もあった。志願強要もあったが、自発的によりよき日本人になろうとした朝鮮人がいたのも否めない。

キーワード：植民地朝鮮、朝鮮総督府、飛行機、航空政策、同化、収奪

目次

はじめに

1. 科学談論と最先端技術としての「飛行機」表象
 - 1-1. テクノロジーの集合体・飛行機の登場
 - 1-2. 朝鮮最初の雑誌『少年』における飛行機
 - 1-3. 朝鮮における飛行機整備と民間航空事業
 - 1-4. 強力で崇高な国家と飛行機の表象
2. 朝鮮総督府による航空思想の宣伝や普及
 - 2-1. 空や飛行機に対する憧れ
 - 2-2. 国家再建と飛行機
 - 2-3. 航空戦力の強化と航空記念行事
 - 2-4. 戦時下における飛行機と科学技術の言説・表象（以上、第57巻第4号）
3. 皇軍パイロットになることができる制度整備と朝鮮人特攻隊員（以下、本号）
 - 3-1. 朝鮮における陸軍少年飛行兵制度の導入
 - 3-2. 航空局の独立と航空機乗員養成所
 - 3-3. 陸軍特別操縦見習士官
4. 「戦争」と「同化」、そして「国家暴力」—なぜ彼らは日本軍パイロットになったのか

- 4-1. 植民地収奪の強化と朝鮮人生活の悪化
- 4-2. 進路選択と出世
- 4-3. 飛行機に対する憧れ
- 4-4. 皇民化教育の影響と日本人への対抗意識
- 4-5. 半強制的な志願強要

おわりに

参考文献

3. 皇軍パイロットになることができる 制度整備と朝鮮人特攻隊員

植民地朝鮮における飛行機表象と朝鮮総督府の航空政策（上）では、朝鮮における科学談論と科学技術進歩の一番強力な表象として大衆に認識された飛行機に与えられたイデオロギーを分析するとともに、朝鮮人の生活の中に飛行機が浸透していくプロセスと航空熱の高揚、航空兵力として巻き込まれていく朝鮮人青年の姿を明らかにした。

1910年代から先端テクノロジーの集合体ともいえる飛行機は、朝鮮でも科学技術の進歩の象徴として大衆に認識され始めた。第一次世界大戦による戦争

i 立命館大学産業社会学部教授

の様相変化は、全国民が戦争の主体で、国民の政治的・思想的団結力が重要であること、飛行機などの新兵器が戦争の勝敗を決する要因となることを日本政府に認識させた。朝鮮総督府は1910年代から敗戦まで朝鮮半島の地理的重要性と飛行機の軍事的な必要性から、京城（現在のソウル）に飛行場を整備するとともに、航空機の特質や文明上の重要性、軍用機としての役割を広げる航空思想やそれを宣伝する様々な行事を全国で開催した。これらの政策を積極的に支持すべく、朝鮮の新聞や雑誌には、飛行や操縦士、科学技術に関する言説が頻繁に登場するようになる。

朝鮮総督府は、飛行機を支配と統治に有効に利用しようと試みた。飛行機は大衆に対して希望と夢に溢れた未来を示しながら、国家の科学技術力と国民を結びつける役割を果たした。国家を理解するにあたって飛行機が重要な存在となったのは、国家の統制の下で航空技術と航空機が徹底管理・開発され、軍事目的で利用されたためである。飛行機に代表される戦争武器表象は、抽象的な国家のイメージを具体的に想起させる役割を果たしただけでなく、国民を国家体制に順応させる機能をも担われた。そして、飛行機は植民地朝鮮の民衆にも、植民地支配と戦争体制を認識する視角を提供しただけでなく、帝国日本と朝鮮総督府の新しい国家統治に順応させる「皇国臣民」としての自覚を促したのである。想像を絶するスピードで飛ぶ飛行機を見た朝鮮人のなかには、日本が統治する新しい時代に畏怖を感じ、既存の思想や国家体制を古めかしく思う人もいた。それほど飛行機は強烈な印象を与えたのである。

視覚媒体は大衆に国家権力を受容させるのに大きな効果があることはよく知られているが、より注目すべき点は、新聞や雑誌、映画、ポスター、博覧会などを通して、飛行機が朝鮮人の日常生活まで浸透したことである。植民地朝鮮の少年にとって飛行機が本格的に日常性を帯びるようになったため、彼らにとって飛行機と空は、憧れの存在であった。帝国日本が進めた様々な航空政策とメディア宣伝は、朝

鮮の少年たちの戦争への恐怖を一掃した。そして、このような総督府の航空熱を助長する政策のもとで、朝鮮人の軍事動員が推進された¹⁾。

そこで、本論文の締めくくりである（下）では、まず朝鮮人特攻隊員がどのような経緯で生まれたのかそのプロセスを明らかにする。朝鮮人の飛行兵が生まれたのは、戦局の悪化に伴う緊急の措置がとられたためである。戦線が拡大し軍事動員が強化されるなか、熟練したパイロットや整備士の養成は喫緊の課題であり、戦争の行く末を左右するといっても過言ではなかった。当時、操縦士が一人前になるためには、少なくとも3年・600時間程度の訓練を受ける必要があったが、これまでの戦闘で多くの操縦士を失った日本軍にはとにもかくにも時間がなかった。そこで朝鮮総督府は、朝鮮人にも操縦士となり、戦争に参加できる機会を与えることとなった。朝鮮人が操縦士に志願できる陸軍少年飛行兵、航空機乗員養成所、陸軍特別操縦見習士官、特別幹部候補生制度などを導入・整備し、朝鮮人にも皇国臣民として「死ぬ権利」を与えたのである。もちろん、操縦士に志願した朝鮮人も日本人も、この段階では想像もしていなかったが、戦争末期に彼らのなかから特攻隊員が選ばれた。

また、多くの朝鮮人青年はなぜ日本軍パイロットになろうとしたのか。その動機はいかなるものか論じていく。彼らは「日本人になりたい」という一心で、「皇軍」になると決めたのであろうか。朝鮮人青年の志願背景・理由を解き明かす。そして、なぜ特攻隊員となったのか。彼らを日本帝国主義と侵略戦争に協力した単なる親日主義者として断罪することはできるのだろうか。日本統治期の差別や抑圧、暴力や搾取、同化や順応の構造の中で、多くの若者が皇国兵士として戦争に参加した動機と意思をどのように考えればよいのかを考察したい。

3-1. 朝鮮における陸軍少年飛行兵制度の導入

これらの制度の中で、最も長い期間、少年を募集したのが「陸軍少年飛行兵」である。操縦士になる

最短コースであったため、特攻死と認定された朝鮮人はこの制度によるものが最も多い。

日本政府は1933年4月、航空戦力を補強するために「陸軍飛行学校における生徒教育に関する勅令」を公布し、初等教育を終えた満14歳から17歳を対象とした少年航空兵制度を新設して募集に入った。入校した少年飛行兵は、無料で1年間の基礎教育と2年間の操縦・整備・通信分野の専門教育を受け、卒業すると下士官に任ぜられ部隊に配属された。1934年2月1日には少年航空兵第1期生170名が、1935年2月1日には第2期生260名が入校する1年に1回の募集であったが、1938年からは1年に2回の募集となり、募集人数も増えた。身体検査と学科試験による入学選考は、もちろん厳しかった。飛行機乗りとしての適性が重視され、血圧などの健康診断に加え、飛行機操縦が可能か否か判定する身体検査が実施された。



図1 陸軍少年飛行兵募集ポスター

出典：公営放送KBS『朝鮮人神風 卓庚鉉のアリラン』2012年3月15日放送オンデマンド

少年飛行兵の養成は、東京陸軍航空学校（1943年「東京陸軍少年飛行兵学校」に改称）が担当した。同校は、1937年に開校して以来、陸軍が少年飛行兵を養成する学校として機能し続けた。単に飛行機のこ

とだけを学ばばよいというわけではなかった。陸軍軍人としての修業を積まなければならない、精神教育の面でも、いわゆる戦時の最大要素とされた「軍人精神」を一刻も早く身に付けるよう叩き込まれた。精神教育で特に強調されたのが、必勝の心構えであった。軍隊教育の基礎となる体力の練成についても、「体力ノ強弱ハ、志気ノ振否ニ至大ノ関係ヲ有ス、体力強健ナレバ志気マタ旺盛ナリ、風土ノ変易ニ克テ困苦欠乏ニ堪ヘ各種ノ任務ヲ完全ニ遂行スルヲ得ベシ、故ニ軍人ハ体軀ヲ鍛エ筋骨ヲ練リ持久力ヲ養イ以テ至難ナル任務ヲ尽スニ豪モ遺憾ナキヲ期スベシ」²⁾というように、頑健なる体力は、また旺盛なる気力を生み、不屈の魂となってあらわれると考えられていたため、体育科目に当然ながら重点が置かれた。

体育科目には、機先を制して一撃必殺する精神を養うことを目的とした銃剣道、諸手軍刀術、短剣術をはじめ、柔道、相撲があった。また、チーム・ワークと闘志を高めるために野球、ラグビー、蹴球、排球も行われた。さらに1940年頃からは、急激な運動に耐えるためのフープ体操（回転器を使用する）、筋骨を柔軟にするマット体操、それにデンマーク体操を取り入れた航空体操が新たに加わった。

1940年に明治神宮外苑で開催された第11回明治神宮国民体育大会には、海軍飛行予科練習生とともに少年飛行兵が初めて参加した³⁾。純白の体操服で登場し、航空体操を披露して国民の大きな関心を集めた。少年兵の鍛えられた身体と気合いに満ちた航空体操やフープ体操は、一段と大会を盛り上げ、日本人を熱狂させた。この大会で国民は改めて少年飛行兵の力量を確認し、彼らを一層誇りに思ったことはいうまでもない⁴⁾。

陸軍少年飛行兵の導入初期、朝鮮人の志願状況についてはあまり報道されていない。だが、年に2回募集されるようになった1938年から志願する朝鮮人が増え始めた『毎日申報』は伝えている。学力試験に合格した江原道出身の朝鮮人を取り上げたり⁵⁾、志願者49名のうち30名が朝鮮人だとその気概を評価した記事もみられる⁶⁾。

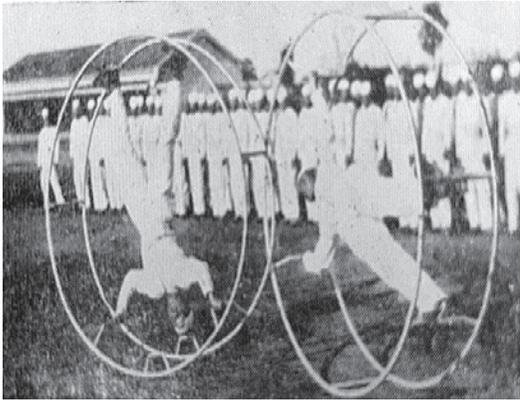


図2 陸軍少年飛行兵の訓練様子
(上) フープ体操の妙技 (下) 平均体操

出典：日本雄飛会編『あゝ少年飛行兵—かえらざる十代の手記』
原書房，1967年，21-22頁



図3 少年飛行兵の募集を詳細に紹介する記事

出典：『毎日新報』1942年8月2日

1943年3月には、少年飛行兵規則が大きく改正される。戦局の悪化に伴い、飛行機の増産と航空隊の拡充が必要となり、少年飛行兵を増強するためであった。従来、朝鮮出身の志願者は、日本の少年飛行兵学校に入学すると1年の基礎訓練を受け、特性によって操縦・整備・通信の3科に分属され本格的な訓練を受けることになっていた。

新制度では、現制度と併行して志願者のうち満16歳以上の者の中から、軍の要請に応じて飛行兵学校を経ずに直ちに操縦か整備か通信の各科学校に入学させ、短期間で所要訓練を終えて戦場に送り出すことができるようになった。すなわち、少年でも実戦にすぐさま参加できるようにしたのである⁷⁾。この改正により、少年飛行兵学校の3年だった教育課程を2年に短縮する短期速成制度(乙種)が施行された。

この時期、少年飛行兵学校の入隊資格や訓練見学記が連日報じられていることも大きな特徴である。わずかに3カ月しか訓練を受けないアメリカの操縦士と比べ、日本の少年飛行兵は素質と技術の面で圧倒的に優秀であり、ゆえに航空戦でアメリカの損害は日本の5、6倍に達するという記事が紙面ににぎわせた⁸⁾。陸軍少年飛行兵の募集と採用は、1945年の敗戦まで続けられた。これまで陸軍特別攻撃隊として特攻死が明らかになった朝鮮人特攻兵17名のうち、陸軍少年飛行兵は9名で最も多かった⁹⁾。

林長守(12期)、印在雄(日本名・松井秀雄, 13期)、河東繁(14期)、李賢哉(日本名・広岡賢哉, 14期)、金光永(日本名・金田光永, 14期)、朴東薫(日本名・大河正明, 15期)、木村正碩(朝鮮名不明, 15期)、韓鼎實(日本名・清原鼎実, 15期)、尹在文(日本名・東局一文, 15期)である。木村正碩は、第77振武隊として1945年4月28日沖縄海上周辺にて戦死したものの、未だに遺族をはじめ、出身地や出身学校など何も明らかになっていない。知覧特攻平和会館の展示室に掲げられた木村正碩の遺影の下には、「遺族・連絡先が不明です。お心当たりの方、教示下さい」と小さな紙がいまでも貼ってある¹⁰⁾。この9

名のほか、通信士の山本辰雄（朝鮮名不明，14期）は、飛行機に放火した疑いで朝鮮が解放される一週間前の1945年8月9日に死刑に処された。山本の事件は、彼が朝鮮人であるがゆえの冤罪だったのでは、と林えいだいはいは結論づけている¹¹⁾。

3-2. 航空局の独立と航空機乗員養成所

航空機乗員養成所は、そもそも軍の施設ではなく民間パイロットを養成する機関であったが、1938年2月、日本軍の飛行士養成のための新しいコースが作られた。軍のパイロットを養成する新コースの誕生は、航空関連の業務を担当してきた航空局が役割を強化するため、1938年2月に通信省分室から完全独立したことに深く関わっていた。

航空局は長官の下に庶務課、監理部、技術部を置き、監理部に規制、調査、監督の3課、技術部に航務課、乗員課、機材課の3課を設け、航空路の開拓、乗員の養成、機材の整備などを担った。そして、独立後の初仕事として、2億5千万円の巨費をもって「航空充実5年計画」を実施することになった。その計画で日本内外航空路の拡充、航空従業員養成、中央航空研究所の設立、航空機製造事業の奨励、航空機乗員養成所の設置などが予定された。

同計画の初年度予算として、航空機製造事業法施行費が8万円、中央航空研究所の設立準備費が50万円、国際航空路開設準備費が8千円、内台定期線施設改善費が26万円など、総額781万5千円が計上された。最も予算が多かったのが航空機乗員養成所の費用であり、116万円であった。

航空機乗員養成所はパイロットの養成機関として、1等飛行士・1等機関士向けの中央養成機関を1カ所、地方に2等飛行士向けの地方養成所（30万坪の飛行場付き）を数カ所設置する計画を定めた。地方の養成所で尋常小学校卒程度の少年を採用し、中等教育を受けながら2等飛行士に5年かけて育てる。その卒業生の中から選抜された者が、中央養成所でさらに1年間、1等飛行士や機関士の教育を受ける仕組みであった¹²⁾。中央養成所は千葉県松戸に、地

方養成所は仙台、新潟、鳥取、熊本、新居浜（愛媛）の5カ所に新設された¹³⁾。

航空局は国産飛行機の大量生産のための研究とその体制確立、そして戦争に参加可能な航空人材の養成を大きな目標としていることが確認できるが、『東京朝日新聞』は、飛行機は日進月歩しており、従来の製造技術や設備や人材がほとんど役に立たなくなったと述べ、航空局の航空充実5年計画について、以下のように強調する。

支那事変におけるわが空軍の活躍は必然的に航空予備軍としての民間航空の拡大強化を要請する。だが、現状のままではどうにもならぬ弱体ぶりである。陸海軍をはじめ、民間航空の元締である航空局が躍起となって量と質の拡充を目論んでいるのはまことに無理からぬことであるが地上設備の改良増設といい、乗員の養成或は内外航空路の開設等何れも少からざる経費を伴うのみでなく、これに要する資材なども相当窮屈になって来ている今日、民間航空の進路は決して容易ではないと思われる¹⁴⁾。

航空機乗員養成所の応募資格は、本科生が11～13歳の国民学校初等科修了以上の者（卒業予定者）で、修業年数は5年間であった。操縦士は16～18歳の中学校3年修了または卒業生で、1年間教育を受けて卒業と同時に軍籍に入り、6カ月間の訓練を経て伍長になる。募集要項は、全寮制で学費が無料のうえ、生活必需品や毎月小遣いが支給されると謳った¹⁵⁾。そのため、朝鮮人少年に人気が高かった。教育内容は軍隊と全く変わらず、卒業生は陸軍の部隊に配属され、第1線の戦力となった。民間の機関であるが、その多くは特攻訓練や作戦に投入された。

特攻隊員として戦死した朝鮮人は、李允範（日本名・平木義範，5期）、岩本光守（朝鮮名不明，12期）の2名である。特攻死ではないものの、出撃途中に墜落死した近藤白英（朝鮮名不明，10期）もいる。

スポーツも万能であったことを強調している点である。一生徒の合格が学校全体の栄光として受け止められ、後輩たちが倣うべき模範的な存在に掲げられた。朝鮮で特操1期生に合格したのは77名だったが、そのうち朝鮮の大学・高専に通った日本人が70名で、朝鮮人はわずか7名だった¹⁹⁾。

『毎日新報』は金尚弼が特操1期生に合格した直後、試験の全過程を詳細に紹介している。この記事によると、金尚弼は、京城にある国軍病院で行われた1次試験に合格し、2次試験を受けるために日本へ行き、東京九段坂にある軍人会館で試験と適正検査を受けて、ようやく特操の採用試験に合格したという²⁰⁾。第2次試験を日本で受けるなど、朝鮮人はわざわざ試験のために日本に行く必要があり日本人よりも負担が大きかった。

もちろん、日本で大学に通いながら、特操に志願した朝鮮人も多くいた。『毎日新報』は、東京で特操に合格した2人の朝鮮人大学生を取り上げている。慶応大学1年生の辛致浩（日本名・佐野光男）と明治大学3年生の大原孝卿（朝鮮名不明）である。辛致浩は、志願した時に父が励ましてくれたことや、半島青年の名誉をかけて精一杯戦うこと、関東で中等学校に通っている弟も志願しようと努力していることを語った²¹⁾。

特操の第1期生として約2500人が採用され、訓練は1943年10月から始まった。彼らは、まず仙台・宇都宮・熊谷・大刀洗の陸軍飛行学校やその教育隊に振り分けられて基本教育を受けた。海軍飛行予科学生とは異なり、ここでは入校して10日ほどでいきなり初飛行を体験させられた。入隊6カ月後の1944年3月下旬には基本教育を修了し、戦闘・偵察・爆撃に分かれて次の教程に入った。操縦訓練は、日本のみならず満州や中国本土、フィリピンの教員飛行隊まで向いて指導を受けた。4月上旬から7月下旬までの4カ月間、1940年前後主力戦闘機として使用された97式戦闘機などを用いた訓練では、必ずしも十分な飛行時間が確保されていたわけではなかった。これを終えると、また日本各地の飛行場で今度は実

戦用の飛行機で訓練を受けた。そして、訓練が始まってちょうど1年後の1944年10月1日に少尉に任官され、次々と戦地に向かったのである。1期生で少尉に任官されたのは2386名であった²²⁾。特操出身者のほとんどは特攻隊に編入され、フィリピンと沖縄で戦死する。

特操で戦死が明らかになっている朝鮮人特攻隊員の卓庚鉉（日本名・光山文博）、金尚弼（日本名・結城尚弼）、盧龍愚（日本名・河田清治）、石橋志郎（朝鮮名不明）の4名は、全員1期生である。特操第1期生の募集が始まった1943年は、まだ朝鮮人の徴兵も学徒出陣も行われていなかったが、特操にはすでに朝鮮人が入隊していたのである。特操は、1944年6月と8月に採用された第3・4期生を最後に募集を停止する。

このほかにも、1943年に新設された特別幹部候補生制度がある。内地をはじめ、朝鮮・台湾・満州でも募集が始まった特別幹部候補生制度は、航空・船舶・通信の現役下士官を補填する特別措置であり、中学3年生修了以上の15~20歳を対象とした。4カ月間初等兵教育を受け、検定に合格すると幹部候補生になることができた。操縦士を志す幹部候補生は、埼玉県の熊谷陸軍飛行学校で教育を受けた。なかでも第7・8・9期に特攻戦死者が多かった。そのうち朝鮮人は、野山在旭（朝鮮名不明）1名である。特別幹部候補生制度一期生の金山常吉（本名不明）は、特攻死ではないが、基地へ移動中に敵機の攻撃を受けて戦死した²³⁾。

また、陸軍士官学校出身（航空士官学校）で特攻死した朝鮮人は、崔貞根（日本名・高山昇、陸士56期）1人だけである。非日本人が陸軍士官学校に入ることは一流大学並みの狭き門であり、朝鮮人学生は1937年度に2名、38年度には1名にとどまるほど、高い壁だった。日本人の特攻戦死者は、崔と同じ陸士56期、その下の57期に多かった。

さらに現役の優れた下士官を航空士官学校で教育して少尉に任官する「少尉候補生」や、幹部候補生で操縦経験のある者から採用する「操縦候補生」な

どの制度があったが、朝鮮人戦死者は見当たらない。

このように朝鮮人隊員は、多様な航空教育を受け、戦死していった。もちろん、特攻隊員に選ばれたが、出撃する前に敗戦を迎えるなどして生き残った朝鮮人兵士も多い。

4. 「戦争」と「同化」、そして「国家暴力」 —なぜ彼らは日本軍パイロットになったのか

朝鮮人の志願兵は、時間が経つにつれて爆発的に増えた。兵士不足が深刻な問題となり、日本政府と朝鮮総督府が綿密に半強制的な動員政策を運用したことがその最大の理由である。

しかしながら、すべての朝鮮人が強制的に志願させられたとは言い難い。志願兵の増加は、朝鮮総督府の暴力的な強制だけでなく、当時朝鮮の社会環境や制度の仕組み、新聞・広告、文学作品・映画などメディアがあおり立てた社会の風潮と結びつけて理解しなければならない。また、朝鮮人青年の志願理由と心理状態、対日意識を「抵抗」か「同化」だけで捉えることには無理がある。朝鮮人の本心を把握することはなかなか難しい作業である。当時朝鮮社会が置かれていた歴史的環境や彼らの思想・行動の多様性、相互関係のなかで歴史的アプローチを行い、複合的に判断しなければならないのである。

4-1. 植民地収奪の強化と朝鮮人生活の悪化

はじめに、朝鮮人青年が軍隊を選ばなければならなくなった理由の一つとしては、植民地収奪の強化と水害や旱害による食糧不足が挙げられる。朝鮮農民の階層は、小作農が中心であった。小作農民では、春になると食べるものが無くなる春窮農民（絶糧農家）が6割に達していた。

朝鮮人農家の食料不足がますます深刻になるなか、戦時下の動員条件に影響を与えたもう一つの要因は、米の供出の強化である。樋口雄一が指摘しているように、帝国全体で食糧不足が深刻化して朝鮮米の需要が高まり、軍用米としての役割が大きくなったの

である。米の全糧供出を保障するために、朝鮮人農家の家宅捜査が警官立ち会いの下で実施された。朝鮮農民には代用食、主に満洲大豆の絞りが配給された。農民の食糧事情はさらに悪化していったのである。また、1939年の朝鮮は大規模な旱魃に襲われ、米の生産高は激減し、大凶作となった。朝鮮総督府が1940年から米の配給を開始するとともに、「朝鮮増米6カ年計画」を実施するなど、問題は深刻であった²⁴⁾。この時、餓死した朝鮮人は、朝鮮総督府の官報に行路死亡人として掲載されている人だけでも5000人以上になった。こうした事態は継続していたが、朝鮮農民の生活をさらに悪化させたのは、1942年から44年まで継続した3年連続の米の凶作であった。また44年末の麦作も凶作となった。米の凶作は、旱害・水害に労働力不足、肥料の不足、強制供出、農具不足などの要因が加わっていた。自然災害だけではなく、物資不足という社会的な要因が加わった大凶作であった²⁵⁾。

家庭に配給される砂糖が減るなか、砂糖は航空燃料の製造に欠かせないので我慢するよう求める記事や²⁶⁾、配給品が公平に分配されず、町会役員や班長の不正行為に調査のメスが入るという記事からは²⁷⁾、朝鮮で食料不足がいかに深刻であったかが窺える。強制供出と凶作が重なって、朝鮮農村の生活は極めて深刻となった。

食料不足と貧困に直面した庶民にとって、寝食が保証される日本軍への入隊は魅力的な選択肢であった。陸軍少年飛行兵の待遇は非常に良い反面、当時の中学校は月謝（5円）が必要で、他に食費や本代が必要となり、工員の父親の月給（40円）では無理をさせることになる。陸軍少年飛行兵として入隊できれば、貧しい戦時期、3食、衣服、小遣いまでもらえることは朝鮮人にとっては大きな魅力であった²⁸⁾。また航空機乗員養成所も全寮制で学費が無料のうえ、毎月小遣いが支給された。立て続けに自然災害に襲われて食も職もない農村の状況を考えると、志願者の9割が小作農出身だったのは当然と言える。

4-2. 進路選択と出世

経済的な問題とも関わるが、もう一つの志願動機は、進路選択の一つであった点である。朝鮮では初等教育の就学率が低く、ましてや中等学校への進学はより難しかった。朝鮮人青年の学ぶ機会のごく一部の者にしか与えられなかった。朝鮮総督府の教育政策により、初等教育が十分に整備されていなかったことに加え、中等教育の機会は極めて限られた状況だったためである。

だが、陸軍少年飛行兵学校、航空機乗員養成所をはじめとする諸制度は、無料で上級教育を受けられる教育機関だった。上級教育を受ける機会そのものが狭められているなか、朝鮮人人口の8割を占めていた貧しい農家の少年にとって、経費がかからず、しかも専門的な技術も学べることは大きな魅力であった。

『毎日新報』には、航空兵になれる様々な制度を分かりやすくまとめ、朝鮮人青年に志願を呼びかける記事が頻繁に登場する。各制度の志願年齢、試験と入校過程をはじめ、入学してからの訓練と待遇、練習、身分、配属、実戦という流れが詳細に紹介されている。「進学之道」として前面に打ち出し、学費の心配なく教育が受けられ、卒業後も出世が早いと宣伝する。どの機種の航空機に関わるようになるといった航空熱をくすぐる情報も盛り込まれた²⁹⁾。飛行兵は教育と出世を同時に達成できる絶好の機会であると認識された。

裴始美・野木香里の研究は、朝鮮慶尚南道馬山生まれで少年飛行兵第19期生だった朴宗根にインタビューし、少年飛行兵に志願した動機を聞いている。朴宗根は家の経済的事情から中学校に進学できず、進路を模索したすえに志願をしたという。その他の選択肢としては「徴兵」か「徴用」しかなく、徴兵は下っ端からしごかれるだろうし、徴用は危険な労働を強いられるので避けたかった。尋常小学校の日本人校長による勧誘も志願した理由として挙げた。米英に対する敵愾心もあったし、さらに自分が志願すれば朝鮮人差別の改善に役立つだろうという思いも

あったという³⁰⁾。

そして、どうせ徴兵されるのだから、早く軍隊に入って出世した方が良いと考えた。兵役が終われば、警察や憲兵、地方官庁の公吏などに特別採用されたからである。軍隊は階級社会なので、日本人から一方的に差別されることはないだろうし、しかも早く昇進すればその恐れはより解消されるだろうと考えた。戦功を挙げれば、家族や自分自身の生活や待遇もよくなる。そうした将来を夢見て軍隊に志願したのである³¹⁾。

また、日本は太平洋戦争が始まった当初は次々と勝利し、東南アジアのほぼ全域を占領していた。朝鮮のメディアが日本軍の躍進のみを報道したため、日本の統治は当然続きそうな風潮だった。朝鮮はいずれ独立できるという希望を持ってない朝鮮人の若者にとって、飛行兵に志願することは現実的で最良の選択だったと言えるかもしれない³²⁾。もちろん、日本や満洲（中国東北地区）に渡る人が増えたことは間違いない。だが、日本統治下、ほとんどの朝鮮人が家族の生活を支えるために朝鮮を離れては生きていけないという現実的な問題から、朝鮮の地で生きていくために仕方なく日本軍兵士になった側面も否めない。

4-3. 飛行機に対する憧れ

大空を飛ぶパイロットになりたいという、飛行機に対する憧れも重要な動機の一つであった。朝鮮総督府と軍部が醸成した航空熱は、朝鮮の青年たちが飛行機に関心を持つきっかけとなった。そして、飛行機は科学技術の象徴として継続的に朝鮮人に伝えられた。この表象は学校教育をはじめ、新聞や文学作品、ポスター、映画、広告を通して社会に広がった。大衆の視覚を掌握する飛行機と飛行機が発信するテクノロジーの物質性とその破壊力はとても強力であった。「空の父空の兄」「若鷲の歌」「決戦の大空へ」「君こそ次の荒鷲だ」など飛行兵に関する時局歌がラジオから流れ、少年たちに人気だった。朝鮮の少年は、飛行機が離着陸する様子を直接見てさらに

刺激され、大空の夢を広げていた。あらゆる表象体系を通して意図的に飛行機の表象が創られ、日常生活の隅々まで飛行機が浸透した。軍用機を操縦し、日の丸のハチ巻きと白いマフラー、半長靴を身につけ、腰に下げ緒を結んだ日本刀をさして郷土訪問する飛行士は、朝鮮の少年にとって憧れの対象であった。こうして航空決戦の呼び声が急速に高まった1943年頃から、特攻の時代を迎えるまで、青少年の航空熱は頂点に達したのである³³⁾。

朝鮮人特攻隊員のなかで、最年少で特攻死した少年飛行兵第15期生・朴東薫(日本名・大河正明)は、幼いころから飛行機が好きで強い関心を持っていた。弟の朴尚薫は、「軍隊に憧れてではなく、飛行機に憧れていたからということに尽きます。子供の頃から、夢中で模型飛行機をつくっては遊んでいました。戦時下では民間航空はほとんど機能していませんでしたから、飛行機乗りになるには、軍隊にいくしかならなかった³⁴⁾」と語っている。朴東薫が幼い頃から飛行機に対して憧れを持っていたことは、『毎日新報』の記事でもよく確認できる³⁵⁾。

少年飛行兵第15期出身の関永洛も、朝鮮にいたころ「牛に草を食べさせていたら、爆撃機が数多く、天気が曇っていて、上がらないまま、漢江にそって汝矣島飛行場に行くのを目たんです。それから飛行士になるのが夢になったんです。人が見えるくらいに低く飛んでいたんです³⁶⁾」と実際に飛行機を目の当たりにしたことがきっかけで、操縦士になろうと決心したという。特操第3期生の朴炳植(法政大学の3年生)も、特操に志願したのは「憧れの飛行機乗り」への道が開かれるためであったと証言しているように³⁷⁾、飛行機に強く憧れて志願した朝鮮人も多かった。

4-4. 皇民化教育の影響と日本人への対抗意識

また、皇民化教育の影響もあろう。1920年代から30年代にかけて、朝鮮では朝鮮人を日本人化する内鮮一体や天皇の忠実な臣民作りが大々的に進められた。徹底した思想の弾圧と統制が敷かれ、植民地政

策が社会の隅々にまで浸透した。一般家庭の少年たちはその統治下で初等教育を受け、成長したのである。皇民化教育と航空熱の影響を強く受けた朝鮮人青年にとって、皇国軍人になることは「内鮮一体」を具現化することであった。多くの朝鮮人青年が志願兵になって、よりよき日本人になろうとしたのも否定できないだろう。

姜尚中は、そのような渴望は「確かに植民地という強制と抑圧の現実なくしてはありえない。しかしよりよき「帝国臣民」になろうとする植民地「半島人」の欲望が、単なる強制にとどまらず、自発的な契機によってつき動かされていることも否定できないだろう³⁸⁾」と指摘した。この「自発的な契機」とは先述した通り、朝鮮社会や朝鮮人に置かれた時代的環境に影響されて作られたものだった。軍隊に入れば、憧れの空を飛べ、軍内部で努力することで、差別もなくなり、日本人になれる、と少なくない朝鮮人が信じた。皇民化政策と航空熱は、こうして朝鮮人の若者を戦場に送り込んだのである。

また、日本人に負けたくないという対抗意識もあったと思われる。日本人でもなかなか合格できない諸制度に合格することで、自負心を満たしたかったのであろう。朝鮮人は軍隊に入ると日本人兵士とされたものの、軍内の配属、日本人上官による差別などで絶えず朝鮮人を自覚させられていた。彼らは、自分は朝鮮を代表しているのだという意識を持つようになる。実際、韓国人遺族がよく主張する内容は、朝鮮人の特攻隊員は日本のために死んだのではなく、朝鮮民族の魂を示すために死んだのだという発言がよく見受けられる。

4-5. 半強制的な志願強要

歴史学者の山口宗之は、朝鮮人・台湾人特攻隊員について、徴兵制の適用を受け無理やり兵役に就いたのではなく、自らの意志をもって軍人の道をえらび、特攻という己の運命を決めた人びとであったと主張している³⁹⁾。だが、山口の言うように、戦争に参加した多くの朝鮮人は「みずからの意志」で入隊

し特攻を選んだのであろうか。戦死した隊員は自発的に特攻作戦に参加したのだろうか。

太平洋戦争で数千人の若者が特攻隊員として戦死したが、彼らがみな天皇と日本のために自発的に志願し、戦死したのかは疑問である。特攻作戦は、隊員の自発的な意志に基づいていたのか、それとも上からの命令なのか、これまでたびたび論争が繰り返されてきた。そもそも死者が1人も出ないような軍事作戦などない。上官は常に部下を死に追いやることを覚悟して命令を下さねばならないが、特攻は最初から死ぬことが分かっている作戦である。軍が作戦として採用した以上、理不尽な命令でも部下は従うほかはないのである。だとすれば、特攻に自発的に志願する人が果たしてどのくらいいたのだろうか。ほとんどが20代前後の特攻隊員の全員が、国や天皇のため自らの命を捧げたいと心から思い、志願したと考えるのは無理がある⁴⁰。海軍が特攻作戦を始めた当初、陸海軍兵学校出身の軍人から志願者が1人も出なかったことから分かるように、特攻作戦は建前では志願制を採っていたが、拒否できずに半強制的に志願させられたというのが実情である。

少年飛行兵第14期生で当時19歳だった日本人兵士の椿恵文（旧名正夫）は、ある日の夜、部隊員の部屋に入ってきた少尉に、特攻隊編成の命令を受けたと告げられた。みな志願したのだろうか、選抜の都合上、ただ今より5分おきに隊長室に行って意志を申告せよと命じられた。そして隊長室に1人ずつ呼ばれ、その場で特攻隊への参加可否を答えさせられたのである。その緊迫した様子を次のように回想している。

いよいよ来るべきものが来た—私は息のつまり
そんな重苦るしさに襲われた。私たちは比島戦で、
特別攻撃隊が編成され、レティ湾頭に散ったとい
うことを知っていた。しかし、それは正直のところ、
何か別の世界の出来事のような感じで、現実
がこのような形で、同じように自分の身に迫って
来るとはいままで少しも考えていなかった。心の

どこかに敵の軍艦に飛行機もろともおれの肉体を
ぶっつけるという自殺行為をやるという先輩たち
の考え方にはとても理解し難い気持が心の隅に残
っていた。だが、今それが突如自分自身の問題と
なったのだ。もはや冷静な批判などはできなかつ
た。黒い死の手を差し伸べられたような感じてあ
った。私はどうしていいかわからなかった。何と
隊長殿に答えるか。頭の中は冷静な思考力を失っ
て混乱し、ただ焦るばかりであった⁴¹。

生きるか死ぬかの決断を迫られた過酷な瞬間であ
った。椿恵文は、部屋中が重苦しい空気につつま
れて胸が苦しかったこと、一刻も早く息が詰まるよ
うな圧迫感から解放されたかたことを告白している。
結局、彼は仕方なく志願したのだが、これは全員同
じだった。

17歳で特攻死した朝鮮人特攻隊員・朴東薫（大河
正明）も、志願を強要されたことを家族に話して
いる。彼は満州での飛行訓練を終えて沖縄特攻作戦に
投入される前に、1945年2月26日に朝鮮京城の飛行
場付近で家族と最後に会う機会を得て、一夜をとも
に過ごしている。父親がなぜ特攻隊に志願したのか
と尋ねると、彼は自分は長男だから特攻にはいけな
いと言ったが、上官たちが家族の世話はするから安
心しなさいと志願を「強要」したという。親に内緒
で少年飛行兵に志願してばれた時ですら、ひと言も
言い訳をしなかった彼だったが、死を目前にして重
い口を開いたのである。志願を強要されたことは、朴
東薫と陸軍少年飛行兵の同期で、同じ教育隊に配属
された衛藤周蔵の証言からも確認できる。生き残っ
た衛藤によると、1945年1月下旬、訓練中に教育隊
長（中尉）から集合を命じられ、隊員全員に紙が配
られ、特攻隊を「熱望する」「志望する」「志望しな
い」の3項目のいずれかにマルをつけよ、と言われ
た。衛藤は「志望しない、にマルをつけた者はいな
かったと思います。大河君をはじめ、私を含めて、10
名程度が選抜されましたが、日を経たず、大河君ほ
か2名が、第一陣として隊から発って行きました。こ

れが彼の顔の見納めでありました⁴²⁾と語った。「志望しない」と答えた隊員は1人もいなかった。命令が最優先され上下関係の厳しい軍隊では、たとえ抵抗感を覚えても、特攻には行かないとは言えなかっただろう。

特攻作戦は志願という名をつけたほぼ強制、あるいは拒めないような状況で進められたというのが本当の姿である。朝鮮人が特攻隊へ志願することは、形式上志願の形を取っているが、文字通りの志願とは捉えられない。個人の意志など顧みられない軍隊での「志願」の有無は、全く意味がないのである。また、被植民者の朝鮮人は、もし断れば家族や同胞がさらなる差別をうけるのではないかという危惧も抱えていただろう。激しい葛藤を秘めていたにちがいない。

おわりに

戦時中、「半島の神鷲」「軍神」として讃えられた朝鮮人特攻隊員は、植民地解放後は韓国で歴史の汚点と見なされ、長い間歴史の記憶から抹消されてきた。韓国社会において特攻隊員は、親日派の代表としてタブー視され、徐々に韓国人の記憶から消えていった。戦時下軍神とか朝鮮の誇りと称賛されていた存在の失墜ぶりは劇的ではある。朝鮮人兵士のなかには、強制的な動員による犠牲者がいたにもかかわらず、解放後の韓国社会では必ずしも植民地支配の犠牲者・被害者とは認められなかったのである。特に、朝鮮人特攻戦死者に関しては、特攻隊員に関する様々な出来事が表面化することはあっても、戦後から現在まで社会的評価は一貫して否定的である。その影響もあり、韓国の歴史学界では植民地支配と朝鮮総督府の統治政策、アジア・太平洋戦争の戦時動員問題については一定の研究蓄積があるものの、朝鮮人特攻隊員の存在は看過され、包括的研究は見られなくその実態は明らかにされていない。

いま韓国に求められているのは、当時、彼らが特攻の道を選ぶしかなかった歴史的状况を総合的に理

解することである。植民地支配の暴力性と戦時動員の被害を考察せず、彼らを日本に同化した天皇主義者、または歴史の犠牲者という単純な二項対立でとらえる視点を乗り越えなければならないのである。何人の朝鮮人が特攻隊員になり、どのように戦死したのか、生き残った隊員はその後をどう生きたのか、という歴史の真実を客観的に把握する必要があるだろう。これは、特攻隊を反民族行為と見なす認識を再考する上で最も優先的な課題である。

一方、日本の歴史社会学、戦争社会学では、特攻作戦に関する研究は著しい進展を見せている。特攻作戦の成り立ちと特攻隊員の手記と日記、特攻隊が生み出した価値観、特攻隊への志願可否、特攻兵器研究、特攻帰還者、戦後特攻の慰霊顕彰事業等々、数多くの歴史社会的な検証が進んでいる。特別攻撃隊の体当たり戦法を自殺行為の愚策とし、軍部指導者らの人間性を無視した作戦を厳しく批判する研究がある一方、特攻作戦そのものを肯定的に評価し美化する右寄りの論調もみられる。

だが、朝鮮出身の隊員は従来の特攻研究で見過ごされてきており、長らく議論や学術研究の対象にならなかった。日本で朝鮮人特攻隊員の存在は1980年代頃からようやく徐々に注目を集めるようになるが、いずれもごく表面的な記述に終わり、志願した背景や彼らの実体を深く掘り下げたものではなかった。朝鮮人が置かれていた歴史的環境は無視され、全ての朝鮮人が日本の同化政策に順応・協力した二等臣民として描かれている。また、2000年以降登場した小説や映画の作品に登場する朝鮮人特攻隊員の存在は、一般的に物語をより劇的にする素材として用いられることが多く、特攻作戦の悲哀性や「感動」のイメージが強調された。植民地支配や戦争の歴史的脈絡から語られるのではなく、感動的な1つの素材に過ぎない。朝鮮人特攻隊員は特攻映画の素材、関心を集める装置として簡単に描かれているに過ぎなかった。要するに、日本人の感情と涙に訴える美談だけが語られたのである。また、日本に忠誠を尽くし、日本精神を見事に体現し、日本のために死んで

いった模範的朝鮮人として評価する論調が多い。朝鮮人特攻隊員はアジア解放の戦いを共に戦うために自発的に特攻兵になり、立派に死んだのだから顕彰しなければならないという。

今、日本に必要なことは、過去の美化でも特攻の顕彰でもなく、加害者として自覚を持って行動することである。なぜ、朝鮮人が日本の戦争に参加し、死ななければならなかったのか、その原因の追及と説明と合わせて、特攻という狂気じみた非人道的作戦を強行した国家の責任を明確にすることである。彼らのような歴史の犠牲者を生み出した責任を日本社会が受け止め、自省を込めてこの問題と向き合っていかなければならない。

これまで両国政府は朝鮮人特攻隊員の死について、それぞれの思想や植民地支配と戦争という時代背景に対する具体的な検討はされず、戦争の加害・被害国、保守・リベラル、右派・左派等の政治的立場やイデオロギーによって評価される傾向にあった。日本では、朝鮮人特攻隊員の問題を「朝鮮人のこと」と受け止め、その歴史的意味を真摯に考えてこなかった。韓国では民族の「裏切り者」「狂気の天皇主義者」として何の議論もないうまま、彼らと遺族は切り捨てられた。

本稿で明らかになったように、朝鮮人の航空兵は、朝鮮総督府の航空政策と当時朝鮮社会が置かれていた複雑な社会背景のもとで誕生したことが明らかになった。そして、特攻が陸海軍航空部隊の主要な戦法となっていくなか、彼らは特攻隊員として選ばれ、戦死していったのである。もちろん、その中には朝鮮が日本の戦時体制に組み込まれていくなか、自発的に「日本人以上の日本人」になることへの渴望から入隊した朝鮮人青年がいたのも否定できない。彼らが朝鮮人として抱いた苦悩や葛藤、生への執着や家族への想いなどを総合的に理解・究明せず、既存の皮相的理解・感情論で済ませていては、朝鮮人特攻隊員は日韓の狭間で「歴史の空白」として永遠に残るかもしれない。

朝鮮人特攻隊員を死に向かわせたものとは何なの

か。彼らの戦死を、今現在を生きている私たちはどのように受け止めれば良いのだろうか。朝鮮人特攻隊員の記憶を両国社会は「親日」と「感動」という言葉に矮小化してよいのだろうか。彼らの特攻死は、日韓社会に何を語りかけているのだろうか。

注

- 1) 朝鮮は1910年に日本の植民地となったが、戸籍や参政権、そして異民族統治の問題から、ごく少数の陸軍士官学校の将校を除いて、兵士としての軍事動員は行われていなかった。朝鮮では日本本土とは異なる「外地戸籍」が適用され、徴兵令(1889年制定)は内地戸籍者だけを対象としたため、朝鮮人は徴兵されなかったのである。徴兵令が1927年に兵役法に改定されても、それは変わらなかった。日本政府は1920年代から徴兵制を目的とする兵役法を植民地のすべての朝鮮人に適用できないかを真剣に検討していた。しかし、直ちに兵役法をそのまま適用するのは「時期尚早」という結論に達した。朝鮮人はまだ皇国臣民・軍人として十分な資質や思想状況に達していない危険な存在だと見なしていたことが大きな理由であった。だが、満州事変の翌年から朝鮮における徴兵制の導入を検討してきた日本政府と朝鮮総督府・朝鮮軍は、戦争が激化するなか、兵役法の前段階として志願兵制を試験的に実施することになった。武器を手にする兵士は高度の忠誠心が要求されるものであり、台湾領有後および朝鮮への支配確立過程で起こった激しい抗日武装闘争を考えると、日本政府は植民地人を皇国軍人として受け入れて活用することには消極的にならざるをえなかったといえる。
- 2) 児玉敏光「陸軍少年飛行兵」日本雄飛会編『あゝ少年航空兵』原書房、1967年、20頁。
- 3) 明治神宮国民体育大会（以下、神宮大会）は、内務省の発案・主催によって第1回大会が1924年(大正13)10月29日から11月3日までの5日間、明治神宮の外苑に完成した明治神宮外苑競技場で開催された。神宮大会は、大正期から昭和初期にかけて行われた戦前日本の唯一の総合体育大会であり、天皇制体制下におかれてきた日本近代の体育・ス

- ポーツの総決算ともいえる。神宮大会は1937年日中戦争の全面的な開始によって、大東亜新秩序建設の喧伝とともに国体主義に加えて軍事色を強めていき、日本政府のスポーツの国家統制、戦争政策の拡大に伴って国家主義的性格をいっそう強めていった。国民精神の作興と体力向上を目指した大会として、戦時下には実施競技が戦技スポーツ化し、戦場運動や筋力的作業の性格をもつ手榴弾なげ・銃剣競技・武装競走、土嚢運搬、行軍などを重視する国防競技が採用された。銃剣道、軍事訓練までも取り入れた。かくして神宮大会は、総力戦下、国民全体に対する体育奨励の場として重視されるようになり、その内容も戦技化したスポーツや国防競技という軍国主義的色彩にいろいろ変えられていった。大会の名称は、第1回と第2回が「明治神宮競技大会」、第3回から第9回までは「明治神宮体育大会」、第10回から第12回までは「明治神宮国民体育大会」、第13回「明治神宮国民錬成大会」に変更した。
- 4) 前掲「陸軍少年飛行兵」21頁。
 - 5) 『毎日申報』1938年1月26日、3頁。
 - 6) 『毎日申報』1938年1月30日、2頁。
 - 7) 「陸軍少年飛行兵増強」『大阪毎日新聞』1943年3月29日。
 - 8) 「少年航空隊員はこのように育つ—土浦航空隊訓練見学記①」『毎日新報』1943年9月22日。
 - 9) 海軍特別攻撃隊における朝鮮人兵士の存在はいまでも確認されておらず、さらなる調査が必要である。朝鮮総督府は1943年に志願兵制を導入したが、海軍は陸軍よりもかなり遅い時期から朝鮮人を受け入れた。それは海軍には高い技術と高度な訓練が必要だったのと、海軍自体が朝鮮人の募集に積極的でなかったためであった。
 - 10) 筆者が知覧特攻平和会館を訪れた、2021年7月29日当時。
 - 11) 林えいだい『重爆特攻さくら弾機—大刀洗飛行場の放火事件』東方出版、2005年。
 - 12) 「航空日本のめざす 独り立ち」『読売新聞』1938年2月2日。
 - 13) 「航空機乗員養成所を新設」『大阪朝日新聞』1938年2月25日。
 - 14) 「躍進の民間航空五年計画遂行へ航空輸送、陣容を整備」『東京朝日新聞』1938年6月1日。
 - 15) 「半島人志願者殺到 航空機乗員養成所募集に反映された熱意」『毎日新報』1943年10月5日。
 - 16) 吉倫亭『私は朝鮮人神風だ』西海文集、2012年、89頁、94頁、99-101頁、120頁。[ソウル]
 - 17) 西山伸「1943年夏の大量動員—「学徒出陣」の先駆として」『京都大学文学部研究紀要』第16号、2018年、6-7頁。
 - 18) 「輝く陸軍特別操縦見習士官」『毎日新報』1943年9月17日。
 - 19) 「学徒征空の挺身隊」『毎日新報』1943年8月10日。
 - 20) 「輝く陸軍特別操縦見習士官」『毎日新報』1943年9月17日。
 - 21) 「半島学徒二名 陸軍特別操縦見習士官試験に合格」『毎日新報』1943年9月7日。
 - 22) 前掲「1943年夏の大量動員—「学徒出陣」の先駆として」10-11頁。
 - 23) 万世特攻慰霊碑奉賛会『よろずよに語り継がん—万世陸軍航空基地概要』2008年。
 - 24) 樋口雄一「朝鮮人強制動員研究の現況と課題」『大原社会問題研究所雑誌』No. 686、2015年12月、13頁。樋口雄一『戦時下朝鮮の農民生活誌—1939~1945』社会評論社、1998年。
 - 25) 糟谷憲一『朝鮮半島を日本が領土とした時代』新日本出版社、2020年、195頁。
 - 26) 「砂糖不足を忍ぼう 航空燃料の原料に」『京城日報』1944年8月13日。
 - 27) 「配給品は公平に、朗かに」『京城日報』1944年3月28日。
 - 28) 山口隆『他者の特攻』社会評論社、2010年、229頁。
 - 29) 「学徒達! 大空の決戦場へ 下城航空課長青少年進学の道を明示」『毎日新報』1943年9月14日。
 - 30) 斐始美・野木香里「特攻隊員とされた朝鮮人」『季刊戦争責任研究』第56号、2007年、69-70頁。
 - 31) 前掲『他者の特攻』229頁。
 - 32) 同前、230頁。
 - 33) 新井謹之助「特攻歌流るる果てに—銃後の現場—ある日々の世界」『別冊1億人の昭和史 特別攻撃隊 日本の戦史別巻4』毎日新聞社、1979年、199頁。

- 34) 桐原久『特攻に散った朝鮮人』講談社、1988年、164頁。
- 35) 『毎日新報』1945年4月15日。
- 36) 裴始美・野木香里「聞き書き—陸軍少年飛行兵から特攻隊員になった朝鮮人」『在日朝鮮人史研究』No.37、2007年、103頁。
- 37) 裴淵弘『朝鮮人特攻隊—「日本人」として死んだ英霊たち』新潮社、2009年、36頁。
- 38) 姜尚中「国民の心象地理と脱—国民的語り」小森陽一・高橋哲哉編『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会、1998年、152頁。
- 39) 山口宗之『陸軍と海軍—陸海軍将校史の研究』清文堂出版、2005年、263-265頁。
- 40) 保坂正康『「特攻」と日本人』講談社、2005年、5頁。
- 41) 椿恵文「生と死の間で—「天陰」特攻隊として出動して」日本雄飛会編『あ、少年航空兵』原書房、1967年、216-217頁。
- 42) 飯尾憲士『開聞丘』集英社、1985年、2-3頁。
- 桐原久『特攻に散った朝鮮人』講談社、1988年、164頁。
- 吉倫亭『私は朝鮮人神風だ』西海文集、2012年、89頁、94頁、99-101頁、120頁。[ソウル]
- 権学俊『スポーツとナショナリズムの歴史社会学—戦前—戦後日本における天皇制・身体・国民統合』ナカニシヤ出版、2021年、28-29頁。
- 栗屋憲太郎「国民動員と抵抗」『岩波講座日本歴史21近代8』岩波書店、1977年、188頁。
- 小磯國昭『小磯國昭和自伝 葛山鴻爪』丸ノ内出版、1965年、641頁。
- 公安調査庁『在日本朝鮮人の概況』法務府特別審査局、1949年、23頁。
- 児玉敏光「陸軍少年飛行兵」日本雄飛会編『あ、少年航空兵』原書房、1967年、20頁。
- 社団法人大韓民国航空会『大韓民国航空 1913-1969』2015年、104頁。[ソウル]
- 田中宏「日本の植民地支配下における国籍関係の経緯—台湾・朝鮮に関する参政権と兵役義務をめぐって—」『愛知県立大学外国語学部紀要』第9号、地域研究・関連諸科学編、1974年、82頁。
- 趙景達『植民地朝鮮と日本』岩波書店、2013年、190頁。
- 朝鮮軍報道部監修・朝鮮軍普及協会編『朝鮮徴兵準備読本』朝鮮図書出版、1942年、31頁。
- 朝鮮総督府『朝鮮総督府施政年報』1938年、218-219頁。
- 朝鮮総督府『朝鮮社会教育要覧』朝鮮総督府学務局社会教育課、1941年。
- 椿恵文「生と死の間で—「天陰」特攻隊として出動して」日本雄飛会編『あ、少年航空兵』原書房、1967年、216-217頁。
- 戸部良一『戦争のなかの日本』千倉書房、2020年、89-90頁。
- 西山伸「1943年夏の大量動員—「学徒出陣」の先駆として」『京都大学大学文書館研究紀要』第16号、2018年、6-7頁、10-11頁。
- 日本雄飛会編『あ、少年飛行兵—かえらざる十代の手記』原書房、1967年、21-22頁。
- 林えいだい『重爆特攻さくら弾機—大刀洗飛行場の放火事件』東方出版、2005年。
- 林建彦・阿部洋編『ニッポン・コリア読本—教科書に書かれなかった歴史の真実と日韓・日朝関係発展の課題』教育開発研究所、1991年、239頁。
- 樋口雄一『戦時下朝鮮の農民生活誌—1939~1945』社

参考文献

- 新井謹之助「特攻歌流るる果てに一銃後の現場—ある日々の精神世界」『別冊1億人の昭和史 特別攻撃隊 日本の戦史別巻4』毎日新聞社、1979年、199頁。
- 飯尾憲士『開聞丘』集英社、1985年、2-3頁。
- 石川準吉『国家総動員史 資料編 第1』国家総動員史刊行会、1975年、324-328頁。
- 伊藤茂「韓国民間航空黎明期の問題に関する研究—大韓国民航空社（KNA）の成立から経営破綻まで」『日本国際観光学会論文集』第26号、2019年、90頁。
- 内海愛子『朝鮮人〈皇軍〉兵士たちの戦争』岩波書店、1991年、11頁。
- 大江志乃夫・浅田喬二・三谷太郎編『岩波講座 近代日本と植民地 5—膨張する帝国の人流』岩波書店、1993年、103-130頁。
- 糟谷憲一『朝鮮半島を日本が領土とした時代』新日本出版社、2020年、182-195頁。
- 姜徳相『朝鮮人学徒出陣』岩波書店、1997年、7頁。
- 姜尚中「国民の心象地理と脱—国民的語り」小森陽一・高橋哲哉編『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会、1998年、152頁。

- 会評論社, 1998年。
- 樋口雄一『戦時下朝鮮の民衆と徴兵』総和社, 2001年, 14頁。
- 樋口雄一『皇軍兵士にされた朝鮮人—15年戦争下の総動員体制の研究』社会評論社, 1991年, 160-168頁。
- 樋口雄一「朝鮮人強制動員研究の現況と課題」『大原社会問題研究所雑誌』No.686, 2015年12月, 13頁。
- 保坂正康『「特攻」と日本人』講談社, 2005年, 5頁。
- 万世特攻慰霊碑奉賛会『よろずよに語り継がん—万世陸軍航空基地概要』, 2008年。
- 裴始美・野木香里「聞き書き—陸軍少年飛行兵から特攻隊員になった朝鮮人」『在日朝鮮人史研究』No.37, 2007年, 103頁。
- 裴始美・野木香里「特攻隊員とされた朝鮮人」『季刊戦争責任研究』第56号, 2007年, 69-70頁。
- 裴淵弘『朝鮮人特攻隊—「日本人」として死んだ英霊たち』新潮社, 2009年, 36頁。
- 水野直樹編『生活の中の植民地主義』人文書院, 2004年, 77頁。
- 宮田節子『朝鮮民衆と皇国化成策』身来社, 1985年, 148頁。
- 宮田節子「皇民化政策と民族抵抗—朝鮮における徴兵制度の展開を中心として」鹿野政直・由井正臣編『近代日本の統合と抵抗4—1931年から1945年まで』日本評論社, 1982年, 239頁。
- 宮田節子・金英達・梁泰昊『創氏改名』明石書店, 1992年, 29頁。
- 藪景三『朝鮮総督府の歴史』明石書店, 1996年, 190-192頁。
- 山口隆『他者の特攻』社会評論社, 2010年, 229-230頁。
- 山口宗之『陸軍と海軍—陸海軍将校史の研究』清文堂出版, 2005年, 263-265頁。

Airplane Representation and Aviation Policy in Korea under Japan's Administration (Part2)

KWON HakJunⁱ

Abstract : The purpose of this paper is to analyze the process of enlisting Korean airmen and suicide pilots and their reasons for volunteering. As the war situation worsened, the Japanese government introduced a system that allowed Korean nationals to become Japanese military pilots in order to compensate for the shortage of Japanese pilots. The training of pilots was an urgent issue that could potentially determine the outcome of the war. Among the reasons for Korean youth joining the military was the intensification of colonial deprivations and severe food shortages. Aviation schools were also attractive due to their free specialized technical and advanced education. Another important motivation was the yearning to become a pilot, capable of flying in the sky. There was also the influence of imperialistic education and a sense of rivalry, wishing not to be outdone by the Japanese. Some Koreans were forced to enlist, of course, but there were also others who enlisted voluntarily in order to become “good Japanese.”

Keywords : Colonial Korea, the Government-General of Korea, airplane, Aviation Policy, assimilation, exploitation

ⁱ Professor, College of Social Sciences, Ritsumeikan University

